



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年10月11日 年間第28主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書25章6-10節a

第二朗読：フィリピの信徒への手紙 4章12-14、19-20節

福音朗読：マタイによる福音書22章1-14節

## 今日のテーマ：終末の宴席

### 三つの朗読から

第一朗読と福音朗読では祝宴、婚宴のイメージが展開します。それはハレの日であり、楽しい時、喜びの食卓です。しかし、この日、この時、この食卓は二度とめぐってきません。だから、ふさわしい姿、ふさわしいところで向かわなければならないのでしょうか。

第二朗読の「わたしにはすべてが可能です」(13節)をここにとめましょう。パウロは自慢げに語っているのではないのです。主イエス・キリストとの関わり合いの中で生きれば、どんな状況でも耐えられるという確信から生じることばです。

福音朗読の「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」(14節)というイエスさまのことばから、善人であれ、悪人であれ、どんな人でも神さまはイエスさまを通して招いてくれることがわかります。問題は招きにふさわしく応えられるかどうかです。

ところで、ミサはすべての人が招かれる宴、祝宴です。それは二度とめぐり来ない、今ここにある宴です。次回というものはありません。終末的な緊張感の中でわたしたちはミサに与っているのでしょうか。

また、日常生活の中でわたしたちは感謝を表明していきます。「ありがとう」、「おかげさまで」といった具合に。それと同じように教会で、典礼の中で感謝を表明しているでしょうか。忙しいけど、用事があったけどミサに来ることができた。この事実がまず神への感謝を表すきっかけとなります。

### 説教

「一期一会 独座観念」ということばがあります。幕末の重臣であり、優れた茶道家であった井伊直弼のことばだと伝えられています。「一期一会」はご存知でしょう。このお茶席とそこでの主人と客

人の出会いは二度とめぐってこない「今この時」の出会いだという意味です。「独座観念」とはそのような「今この時」かぎりのお茶席での出会いだからこそ、客人が帰っても主人はそそくさと片付けなどせず、お茶席での出来事をしみじみと思い出し、客人に思いを馳せることです。そのために独り茶室に座して、一服のお茶を点てるひとときの大切さを示すことばです。

今日の福音に出会うといつも「一期一会 独座観念」のことばを思い出します。王子さまの婚宴は一度きりの宴の時です。しかし、招いた人々はやってきません。「今この時」に、王さまと喜びを分かち合うことを拒否したのです。もう二度と、そんなチャンスは廻ってはこないでしょう。王さまは通りに出て、手当たり次第に人々を婚宴へと招きます。まさか招かれるとは思ってもみなかった人々が披露宴の席へとやってきます。「今この時」の出会いの始まりです。まさに二度とはこない「一期一会」の時です。

しかし、そこに婚礼の礼服を身につけず、普段着で参加する人がいました。それを目にして驚く王さまの姿とその後「外の闇に放り出せ」ということばに読み手であるわたしたちは戸惑ってしまいます。「悪人であれ善人であれ、出会う人をみな集めてきた」のに、ちょっと礼服を着ていないだけでこんな扱いをされるのは理不尽だからです。

もしかしたら王さまは「独座観念」を意識していたのかもしれませんが。きっと、王さまは宴が終わったあと、招かれた人々が家路に着いてから、独り静かに今日の出来事を振り返ろうとしていたのでしょう。その時、「いろいろな人々が婚宴にやってきてくれた。それぞれが工夫して、精一杯の礼装をしてお祝いに駆けつけてくれた。ありがたいな」とお祝いの席についていた人々の一人ひとりを思い巡らしたかったのではないのでしょうか。しかし、実際には精一杯の礼服も身につけず、ましてや「今この時」の特別な席、ハレの席を意識せずに、婚宴に来た人物がいたことに怒りがこみ上げてきたのだと思います。

人生は「一期一会」です。「今この時」の出会いと交わりを生きます。同時に「今この時」にいただいた恵みに感謝し、味わう「独座観念」も必要です。そんな時間、場面を作ることができなかつたら、婚礼の礼服を身につけない日常の時が過ぎていくだけです。それでは王さまとの、つまり神さまとの出会いは生まれません。精一杯のこころの礼服を身につけていますか？

